

元気で躍進 地域経済

障害者が箱詰め、納品も

介護事業所「あゆか」
あゆか協力 防災非常食「白い小箱」運動

障害者支援の生活介護サービス事業所「あゆか」(松阪市鎌田町、飯田あゆみ施設長)が、水や食料など災害用物資を詰め、納品の住宅や事業所などへの設置を広げる「白い小箱運動」に力を入れている。施設利用者が箱詰めなどの作業を行い、納品にも同行する。飯田施設長は「利用者が社会とつながりを感じられる場にもなっている」と話し、「もっと運動を知ってもらえるようにしたい」と話す。

白い小箱運動は、一般社団法人・日本非常食推進機構(本部：四日市市、古谷賢治代表理事)が推進。水や食料などを詰め

た「白い小箱」を個人や企業、自治会などに販売することで、災害時の「自助」力を高めるもの。

平成24年8月

には同法人は松阪市と災害用物資に関する協定を結ぶなど、県や市町とも協力を広げている。箱は基本的なもので1つ1500円。3年半から4年で交換する。期限切れ間近のものは、海外を含む災害支援物資としても活用する。



自分たちで箱詰めした小箱を南支店長に手渡す大野さん(左)

川井町の三重信用金庫川井町支店で

この運動は、地元の障害者施設などで箱詰めや納品などを行うのが特徴。同法人は納品先に近い施設に物資と箱を送り、箱詰めや納品を「委託」する。障害者就労継続支援事業所などでは、委託料が利用者の作業の工賃となる。

昨年11月に開設したあゆかでは、この運動を知り開設直後から協力を始めた。同施設は作業所で

飯田施設長は「自分たちの『社会のため、防災のために役立つ』という思いと、障害者支援の思いが重なれば、もっと運動を知ってほしい」。知り合いを通じた口コミなど、できる範囲での納品先の「新規開拓」にも注力する。

はなないため、利用者が本格的に作業をすることはできない。作ることでできる数にも限りはあるが、「施設の中だけではできない社会と触れる機会になる」と飯田施設長。職員が見守りながら、利用者が見守りながら、利用者が入っていく。工賃を利用者に支払うことはできないので、委託料は施設行事の際の交通費など利用者サービスに活用している。

これまで、自治会から20箱の注文を受けたり、小口のものなどで箱詰め、納品を利用者が行ってきた。このほど、施設の取引先でもある川井町の三重信用金庫川井町支店(南藤和支店長)から11箱の注文を受け、20日には利用者の大野晃さん(19)も同行して納品に。大野さんが南支店長に箱を手渡した。